夏の思い出

作＝かねたたき

「あなたたち、もう遅いんだから、早く寝なさいよ」
「はーい、おやすみなさーい」
休みを利用して、私たちは３家族でキャンプに来ていた。同じ５年２組の静香と晴子、私と妹の友紀、そしてそれぞれの両親だ。
静香が灯りを消したら、母はテントから出て行った。もちろん灯りを消したからといって、寝る気はさらさらない。私たちは声をひそめてしゃべり続けた。
「ママたち、あれ、やるのかな？」
「あれって、この間、保健の授業で出てきたやつ？」
「うん」
「やだ、友子、エッチ」
「でもさあ、私たちは４人で１つのテントだけれど、ママたちは３つのテントに分かれてるんでしょ。怪しいわよ」
「お姉ちゃんたち、何の話をしているの？」
友紀が口を挟む。
「子どもは知らなくてもいいの」

「お姉ちゃんたちだって、子どもじゃないの」
「友紀ちゃんはまだ2年生でしょ。2年生と5年生を一緒にされたんじゃ困るわ」
それからどれぐらいしゃべっただろうか。友紀はもうぐっすり眠ってしまっている。
そのとき、テントの外で物音が聞こえた。またママが来たのだろうか。
「しっ！　寝たふりをするわよ」
晴子の合図で、私たちは寝たふりを始めた。
人が入ってくる物音が聞こえる。私の方に近づいてきた。え？　私は寝具をはぎ取られ、Tシャツもめくりあげられた。
「きゃ！」
私は目を開けた。暗くてよく見えない。
「静かにしろ」
聞いたことのない男の人の声だ。その人、私の胸を触ってきた。
気持ち悪い！私は払いのけようとしたが、男の人の力にはかなわない。
テントの中が明るくなった。晴子が灯りをつけたのだ。男の人が私の上に馬乗りになっている。顔にはプロレスラーの覆面をしている。右手には……ナイフが握られていた！
「あなた、誰よ！」
晴子が叫ぶ。

「静かにしろと言っただろうが！こいつがどうなってもいいのか！」
男の人はナイフを私の喉元に当てた。
晴子と静香は唇をかみしめた。おとなしくするしかない。もちろん私もだ。友紀はまだ眠っている。
男の人は私の胸をさんざんいじくったあと、ジャージに手をかけ、おろそうとした。しかし片手では無理みたいだ。両手を使おうとして、ナイフが喉元から離れた瞬間、私は男の人のナイフを持っている方の手首にしがみついた。　晴子と静香も協力する。3人がかりで、ナイフを持った手を地面に押さえつけた。しかし男の人の力は強く、晴子と静香ははねとばされそうになった。
「お姉ちゃんをいじめるなー！」
そのとき友紀が起きあがった。この騒ぎで目が覚めたのだろう。そのまま私の上で四つんばいの状態になっている男の人の後ろに回ると、思い切り男の人の急所を蹴り上げた。
「ぐっ…」
男の人はくぐもった声を上げ、左手であそこを押さえてうずくまった。そのすきに3人でナイフを取り上げ、私は男の人の下から脱出した。
「ありがとう、友紀」
「やるじゃない、友紀ちゃん。でもそんなこと、どこで覚えたの？」
「お姉ちゃんに教えてもらったの。男の子をやっつけるには、タマを蹴るのが一番だって」

「友子が教えたの？」
「うん。ほら、この間、授業で男女のしくみを習ったときに、クラスでもそんな話題が出たでしょ。その日に家で話したんだ」
「そうか。そう言えばあの日以来、クラスの男子、おとなしくなっちゃったわよね」
「うん、何かあったら、女子みんな、すぐに金蹴りをするもんね」
「友子のスカートをめくった前川なんか、悲惨だったよね。いきなり友子にタマ蹴られて、そのあとクラスの女子全員から蹴られて、一週間休んじゃったもんね。今じゃすごくおどおどしちゃってさ」
「私のスカートをめくったんだもん。金蹴りの５０発や１００発、当然の罰よ」
「橋上先生も、私たち女子の味方だもんね。て言うか、教えてくれたの橋上先生だし」
「最初は全員の前で一通り体の違いについて説明してさ、放課後女子だけ残してタマの蹴り方や攻撃方法を教えてくれたんだよね。あなたたちも将来、痴漢なんかの被害にあったら困るからって」
「橋上先生自身も、よく痴漢にあうらしいよ。まあ、あれだけきれいであれだけ胸が大きけりゃ、当然よね」
「でも橋上先生、金蹴りでみんなやっつけちゃったんでしょ」
「やっぱり、金蹴りはきくよね。タマを蹴れば、男子なんかみんな一発でＫＯだもんね」

「蹴られた男子が橋上先生に言いつけに行っても、橋上先生、『女の子たちが、将来痴漢にあっても困らないように練習してるんだから、我慢しなさい』って言ってくれてるし」
「私もお姉ちゃんに教えてもらってから、クラスのほとんどの男子のタマを蹴ったよ。男子なんてみんな弱っちいの。今じゃクラスの男子みんな、女子の言いなりよ」
「さすがは友子の妹よね。でもこんな大きな大人でも、友紀ちゃんみたいなちっちゃい子の金蹴りで倒れるなんて、本当にタマって弱いんだね。男の急所と言われるわけだ」
　静香がうずくまっている男の人の頭を踏みつけながら言った。
「友紀、こわくなかった？」
「大人の男の人でもタマを蹴ればイチコロだって知ってるもん。体育の時間に逆上がりをやって、わざと藤田先生が目の前に来たときに、気づかないふりをして思いきり蹴り上げたんだ。そしたら藤田先生、気絶しちゃって、夕方まで保健室で休んでたんだって」
「えー！ あの藤田先生が？」
　藤田先生っていうのは、体育専門の先生だ。大柄でがっしりしていて、ゴリラみたいな先生。
「橋上先生も言ってたじゃん。タマは骨や筋肉で守られていないから、どんなスポーツマンでも弱いんだって」
「きゃ」
　静香が声を上げた。静香の足の下敷きになっていた男の人が、静香を払いのけて逃げようとし

た。そうだ、話に夢中になっていて、この男の人の存在を忘れていた。静香と晴子が両脚にしがみつく。男の人の動きが止まる。私は後ろから男の人に近づくと、タマを握りしめた。男の人は脚を閉じて上半身を丸めた。

「さあ、これでもまだ逃げようとする？」

私はタマを握る手に力を入れた。こうすれば男の人は動けなくなるんだから。晴子が男の人の覆面をとった。男の人の顔があらわれる。大学生ぐらいだろうか。見たことのない顔だ。

「この男の人、どうする？」

男の人の手と足を縛りながら、静香が言った。

「カイボーしちゃおうか」

「そうね、やろうやろう」

「友紀ちゃんも、オチンチン、見たいでしょ？」

「うん。でもクラスの男子のオチンチン、みんな見たよ。見せてって言ったら、みんな見せてくれるもん。ちょっとでも嫌そうな顔をする子も、タマを蹴り上げれば言うことときくし」

「友紀ちゃん、そんなことやってるの？」

「２学期に入ったら、私たちもやろうかしら。嫌がったら金蹴りすればいいんだもんね」

「それじゃあ脱がすよ」

私は男の人のズボンとパンツをおろした。４人の視線がオチンチンに集中する。

「あれー？」

友紀が声を上げた。

「この人のオチンチン、クラスの子のともパパのとも違うよ」

確かにそうだ。幼稚園の時に見たオチンチンは全体が一つながりになっていたし、小さい頃にパパと一緒にお風呂に入っていて見たのは先が二段になっていて色が違っていた。でもこの人のオチンチンは、一つながりになっているようで、本当に先っちょの部分だけが色が違う。

「本当だ。でも大きいね」

晴子が言う。

「そう？私のパパのはこんなのだけど」

と静香。

私はオチンチンを引っ張ってみた。

「あ、男の子たちのと同じになった」

先の色の違う部分がかくれた。今度は逆に押してみる。

「パパのと同じになったよ」

色の違う部分がでてきた。さっきと違って、二段になっている。

「キャハハハ」

私はおもしろくなって、引っ張ったり押したりを繰り返した。色の違う部分が出たり引っ込ん

だりする。
「どうなっているんだろうね」
晴子が言うが、私もわからない。わからないまま手を動かしていた。
するとだんだん、私の手の中でオチンチンが変化してきた。だらんとしていたのが硬くなって、一回り大きくなった。先の色の違う部分が完全にはかくれなくなった。その上少し熱くなってきたようだ。摩擦熱だろうか。でも私の手は熱くなっていない。
「これ、男の子が言ってる『立つ』っていうやつじゃない？」
静香が言う。そう言えばクラスの男子が「チンポが立った」って言ってるのを聞いたことがあるが、こういうことなのか。
「これをあそこに入れるのが、ＳＥＸよね。でもこんな大きいもの、入るのかしら」
「試してみようか」
「だめよ、友子。橋上先生も、『大きくなって本当にこの人と一生一緒になりたい、この人の子どもがほしい、と思える人としかしちゃいけない』って言っていたでしょ」
「そうだったわね。『もしそうでない人にされそうになったら、タマを思い切り握りつぶしなさい』だったわね」
「『好奇心や相手に嫌われたくない、という気持ちでしてしまうのはよくない。だいたいそれで嫌うような男なんて、体だけが目当てなんだから、絶対にタマをつぶしてしまうべき』って」

「そうね。やめとこう」
私は手を動かし続けた。なんだかオチンチン、さらに少しずつ熱くなってきているみたい。それにドクドクと脈打っている。
「あ、タマがひくひくしてきた」
そう言うと静香はタマを下から叩いた。男の人がぎゃっと声を上げる。オチンチンは元通り、小さくしぼんだ。
「キャハハハハ、面白ーい」
私たち４人はケタケタ笑った。
「ねえ、今度は私にもやらせて」
「それじゃあ、順番にオチンチン担当とタマ担当をやっていこうか」
というわけで、私たち３人（友紀を除いてね）は、かわるがわる同じ事を続けた。男の人は苦しそうにしているけど、手足を縛られているから抵抗できない。
どのくらいやっただろうか。少し外が明るくなってきた。
「ねえ、これ、このまま続けたらセーシが出るんだろうか？」
「やってみようか」
静香はオチンチンをこすり続けた。今までで一番大きくなったみたい。タマの動きが大きくなったと思った瞬間、

「きゃ」
オチンチンの先から白いどろっとしたものが勢いよく出てきて、静香の顔にかかった。
「なに、これ、くさーい！それにねばねばするー」
静香が声を上げる。男の人は幸せそうな顔をしている。私は腹が立った。
「なんてことするのよ！」
私はタマを思いきり蹴り上げた。男の人は体を丸めて苦しんでいる。蹴ったときに私の足にもねばねばしたものがついた。
「うえっ、汚ーい」
私は足を男の人の服で拭いた。静香は顔を洗いに外に出て行った。私もあとで足を洗いに行こう。
「もう許さない。徹底的にやってやる！」
「私もやるわ」
「今度は私も混ぜて」と友紀。
「もう嫌、まだにおいがついてるみたい。こんなやつ、地獄の苦しみを与えてやる！」
手洗い場から帰ってきた静香が言う。私と晴子は体を丸めている男の人を起こした。正面にまわった静香が、思い切りタマを蹴り上げた。男の人は苦しそうにしているけど、倒れないように私たち２人が支えている。なおも静香は蹴り続ける。

「静香、ストップ！ 次は私の番よ」
静香が１０発目を蹴ったところで、私が声をかけた。
「これから私たちが順番に、１０発ずつ金蹴りしていくからね。何まわりもつかしらね。タマがつぶれないように、祈っておきなさい」
そう言って今度は私が１０発。
「男のくせに女を襲おうなんて甘いわよ。タマがついてる限り、あなたは私たちには勝てないわ」
晴子が蹴り上げると男の人は泡を吹いて気を失った。私たちは男の人の顔を叩いて意識を戻させると、再び蹴り続けた。
「タマ、つぶしちゃうわよ！」
友紀の番だ。力が弱い友紀でも、タマへの攻撃は威力十分だ。
何周、いや、何十周しただろうか。男の人はぴくりとも動かなくなった。外は完全に明るくなっている。
「この人、絞首刑にしよう。いや、絞タマ刑かな」
私はロープを持ち出した。男の人のタマの根元をしっかりと縛り付ける。そして４人でロープを引っぱってテントの外に出た。男の人は引きずられたままだ。私はテントの近くにあった大きな木の丈夫な枝にロープを投げてかけた。
「せーの！」

そして４人がかりでロープを引っぱった。男の人はタマでぶら下がる状態になった。私はロープの端を他の木にしっかりと結んだ。男の人はじたばたするが、よけいタマを締め付けるだけだ。

これでよし。私たちはテントに戻って、またおしゃべりを始めた。